

富士紀行（55） 道と宿

先日(3/10)、一足早いお花見に河津町に出かけた。染井吉野よりはピンクが濃かったけれども、それでも紛れもなく桜であった。2月10日から開かれていた第11回伊豆河津桜祭りの最終日であった。緋寒桜と早咲き大島桜の自然交配種と言われているが、町民よりも数多い桜が川沿いやあちこちに植栽されていた。河津川の土手に菜の花の黄色と桜のピンクのコントラストが素晴らしかった。

桜の花道の散策を楽しんだ後、隣町の稲取温泉街の伝統的風習の「雛のつるし飾り」で目を楽しませて貰った。母が娘の健やかな成長を願って、縁起物や厄除け、魔除けの端切れの人形を何体か吊したものである。

さて、今年2001年は、東海道の宿駅制度が出来てから丁度400年であり、静岡県では、これを記念して、「東海道400年祭」を開催している。関ヶ原戦の終結した直後の1601年(慶長6)正月、徳川家康は、東海道諸宿に伝馬の制を布き、一日に36疋までの伝馬の提供を命じ、代償に居屋敷を与えた。日本橋と京都3条大橋に53の宿がある。静岡県内には22宿あるが、残念ながら小山町・御殿場市・裾野市地区は東海道五三次の宿場はないけれども、東海道が箱根路の箱根八里に変更される以前は、酒匂川の川口から、支流の狩川に沿って西北へ遡った。即ち、箱根山を大きく北に迂回し、関本から足柄峠を越えて小山町に抜ける足柄道が東海道の本道であった。竹之下には宿場が設けられていた。この故もあって、小山町も東海道400年祭に参加している。

嘗ては、東海道は足柄路が本道であって、当時は御殿場・小山地区もそれなりに往来が多く賑わったのだが、箱根路に変更されてからの賑わいはそれ程ではなかったのだろう。1889(明治21)年には、現在の御殿場線を本線とした東海道本線が静岡まで開通し、本地域はまた大動脈としての役割を取り戻した。しかしながら、1934(昭和9)年丹那トンネルの開通により、熱海線が東海道本線とされ、今日に至っている。しかしながら、東名高速が本地域を貫通し、大動脈としての役割が又復活した。こうしてみると道の変遷というのは面白い物だと思う。

[閑話休題]

小山町内の400年祭記念事業を管見してみよう。(広報おやまから)

- ① 足柄地区 足柄竹之下宿場祭り (足柄地区実行委員会)
- ② 北郷地区 北郷三国峠県際まほろば交流 (北郷ボランティアの会)
- ③ 金太郎誕生伝説街道 (金太郎探索実行委員会)
- ④ 樹齢400年大銀杏祭 (大胡田下古城実行委員会)
- ⑤ 富士山東口登山道と須走宿 (須走宿実行委員会)

須走は、甲駿交通の要衝であり、富士山登山道登り口として賑わっていた。須走登山道の道標設置も記念事業の一環のようだ。小生が先般確認したところでは、5種類の道標があった。松並木、芭蕉句碑、大柳、大日堂入り口、第一回探鳥会会場ところで、この第一回探鳥会というのは、今ならさしずめバードウォッチングというものだろう。森林豊かな須走は日本有数の野鳥の宝庫であり、野鳥を口笛で呼び寄せる名人もおり、野鳥研究家の来訪が相次いだ。そこで、「日本野鳥の会」が昭和9年3月設立され、6月2日及び3日の両日にわたり、我が国初の鳥巢見学会（後の探鳥会）が行われた。

柳田国男、北原白秋、金田一京助・同春彦、若山牧水夫人喜志子などと言った文人・画家・学界人等40余名が参加している。（参考：小山町史第8巻）

さて、この須走宿の記念事業に、富士駐屯地の曹友会も支援している。須走宿の記念事業については、情報入手次第掲載したい。